

平成 13 年度の漁況

安木茂・道根淳

1. まき網漁業

(1) 漁獲量の経年変化

図1に1964年(昭和38年)以降の浜田港のまき網漁業における主要5魚種の漁獲量の経年変化を示す。2001年(平成13年)の漁獲量は8,767トンで、過去38年間で最低となった。浮魚類の漁獲量は1989年をピークに

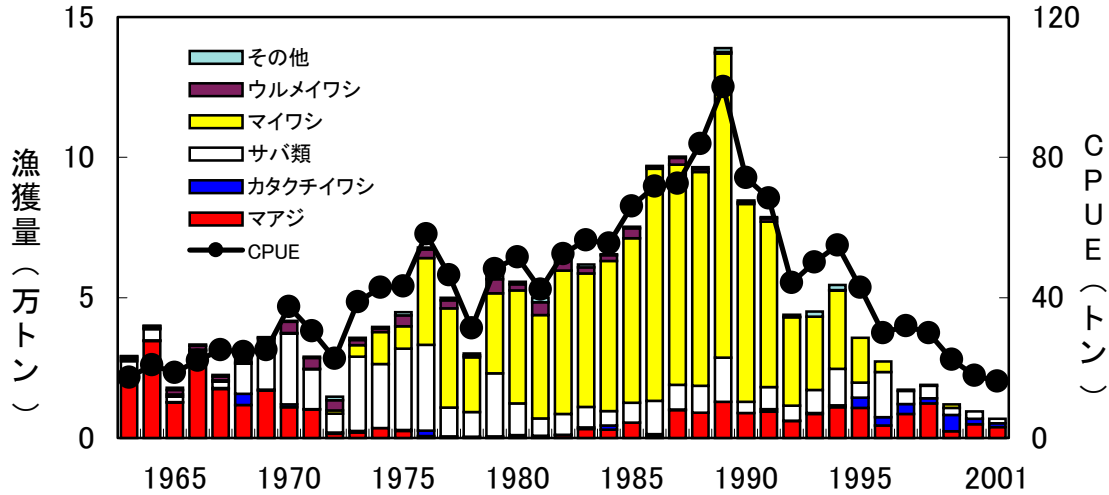


図1 浜田港所属の中型まき網船による魚種別漁獲量とCPUEの推移

減少傾向で、その主な要因としてはマイワシ資源の減少、マアジ・マサバ等マイワシに替わる魚種の漁獲の伸び悩みがあげられる。2001年はウルメイワシ以外の魚種すべてが前年を下回っており、極めて低調に推移した。

(2) 魚種別漁獲状況

図2～6に中型まき網によるマアジ、マサバ、マイワシ、カタクチイワシ、ウルメイワシの漁獲量の平年値(過去5ヶ年平均)、前年及び今年の季節変化を示す。

①マアジ

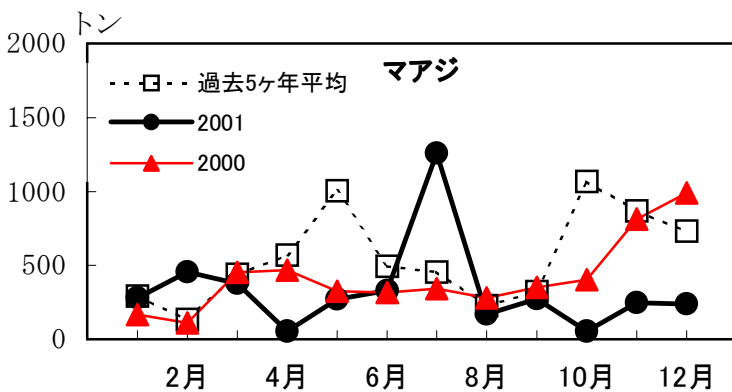


図2 浜田の中型まき網によるマアジ漁獲量

図2に浜田港の中型まき網漁業によるマアジ漁獲量の季節変化を示す。

2001年の総漁獲量は4,008トンで平年の61%、前年の80%となった。

7月に山陰海域全体で0歳魚(尾叉長6~7cm)の魚が活発化した。例年7月は1歳魚が中心で、0歳魚は9月になってから漁獲され始め、大きさも9~15cm程度の大きさである。しかし、2001年は0歳魚の漁獲時期が2ヶ月早く、大きさも6~7

cmと小型であった。秋以降、この0歳魚が引き続き漁獲されることが期待されたが、漁獲は伸び悩んだ。

②マサバ

図3に浜田港の中型まき網漁業によるマサバ漁獲量の季節変化を示す。

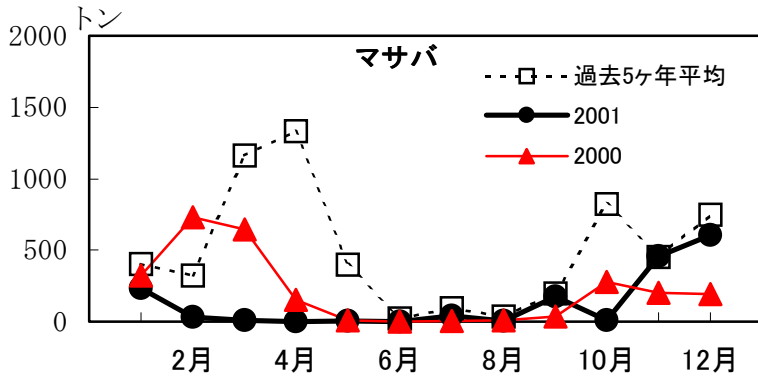


図3 浜田の中型まき網によるマサバ漁獲量

2001年の総漁獲量は1,579トンで平年の26%、前年の61%となり、平年・前年を大きく下回った。漁獲の主体は尾叉長25cm前後の豆サバ(0~1歳魚)で、2歳魚以上の高齢魚の漁獲は少なかった。11月以降漁が活発化しており、今後の漁に期待が持てるが、春漁が不振であったことが影響し、年間を通した漁獲は低調に終わった。

③マイワシ

図4に浜田港の中型まき網漁業によるマイワシ漁獲量の季節変化を示す。

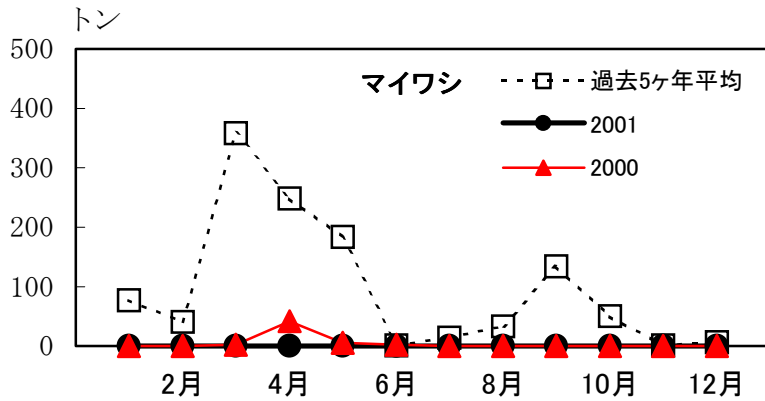


図4 浜田の中型まき網によるマイワシ漁獲量

2001年の総漁獲量は0.4トンで平年の0.03%、前年の0.7%で平年・前年を大きく下回った。浜田ではマイワシの姿をほとんど見ることは無かった。全国的なマイワシの漁獲状況は、太平洋でややまとまった漁獲が見られることもあるが、日本海側ではほとんど漁獲されない。マイワシ資源は依然として低水準状態である。

④カタクチイワシ

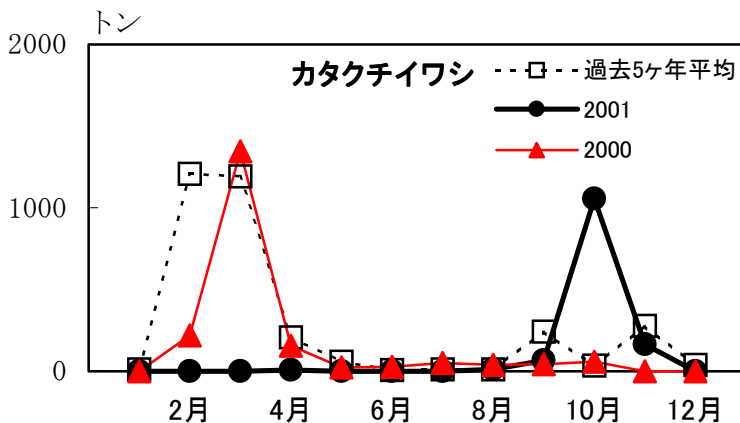


図5 浜田の中型まき網によるカタクチイワシ漁獲量

図5に浜田港の中型まき網漁業によるカタクチイワシ漁獲量の季節変化を示す。カタクチイワシの漁獲量は1995年以降1999年までは、冬期を中心として3,000トンから3,500トン程度の漁獲があった。しかし、2000年、2001年と1,000トン台で推移している。2001年の漁獲量は1,313で平年の40%、前年の67%と平年・前年を大きく下回っている。

⑤ウルメイワシ

図6に浜田港のまき網漁業によるウルメイワシ漁獲量の季節変化を示す。

2001年の漁獲量は64トンで平年の12%、前年の348%と平年には及ばないものの、極めて低調であった前年を上回り、浮魚類の中では唯一、増加傾向となった。夏以降山陰西部から九州西岸にかけて、0歳魚の発生量が多かったと考えられ、資源は回復傾向にある可能性がある。

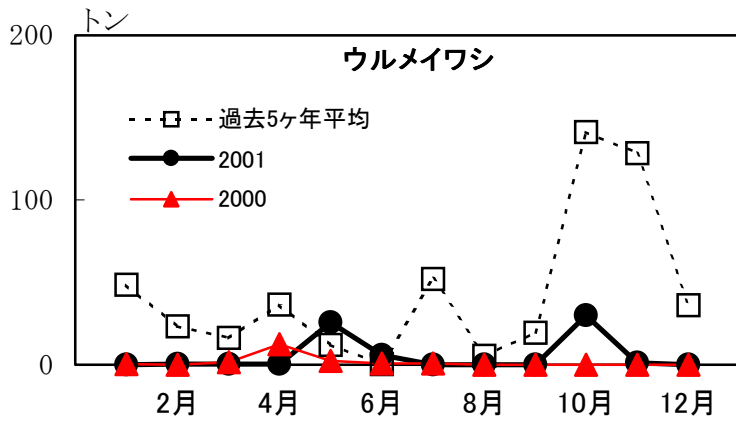


図 6 浜田のまき網によるウルメイワシ漁獲

2.釣り漁業

(1) スルメイカ

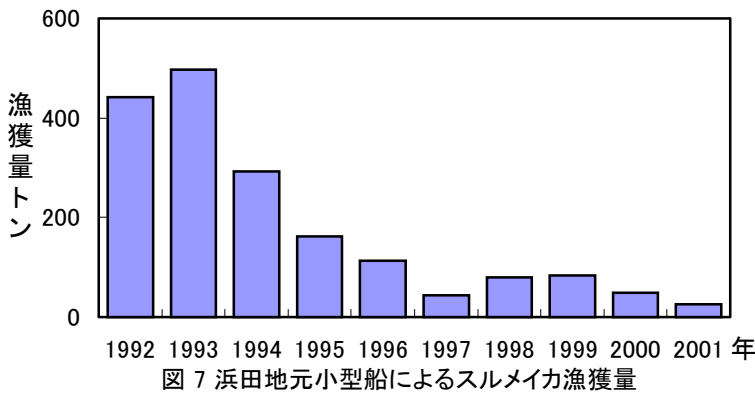


図 7 浜田地元小型船によるスルメイカ漁獲量

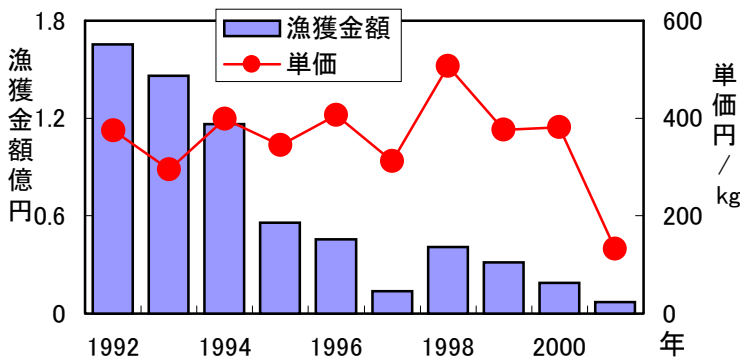


図 8 浜田地元小型船によるスルメイカ漁獲金額および単価

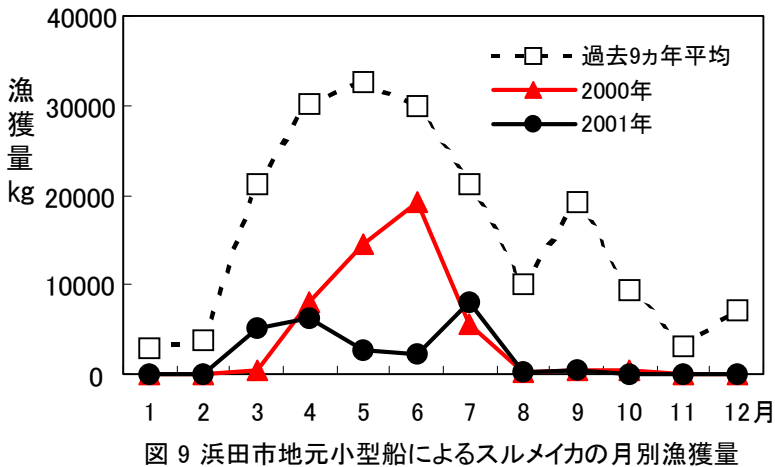


図 9 浜田市地元小型船によるスルメイカの月別漁獲量

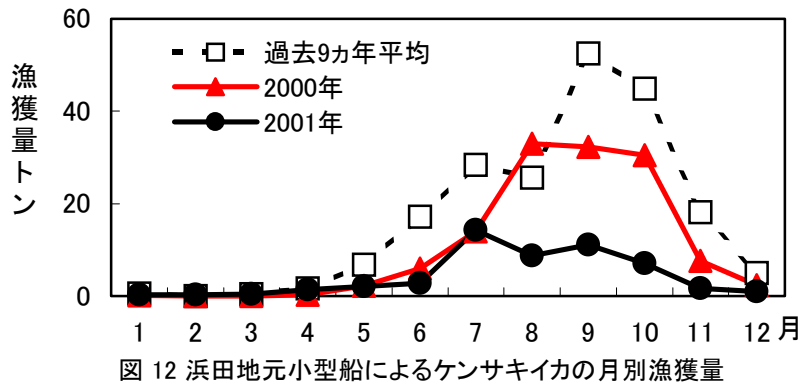
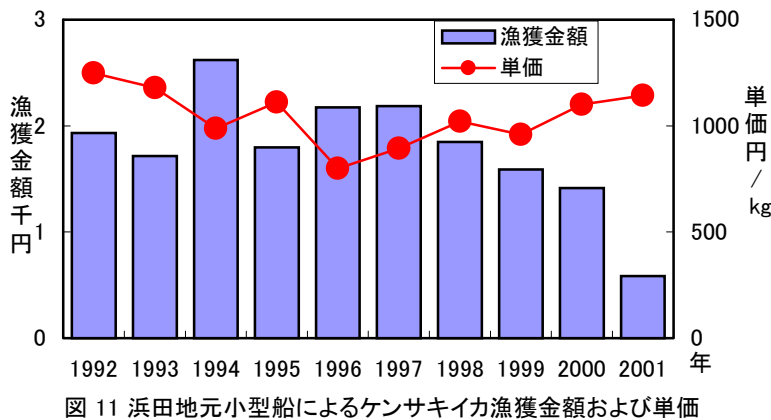
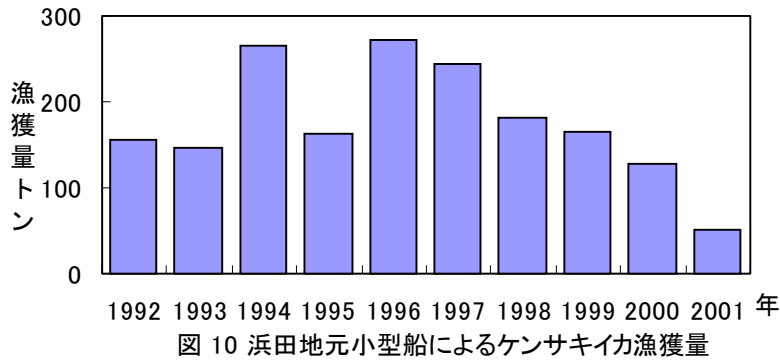
島根県西部海域を主漁場としている小型イカ釣り船によるスルメイカの漁獲動向を図7～9に示す。2001年の漁獲量は25トンで、前年(49トン)の52%、平年(過去9ヶ年平均)の14%と低調に推移した。漁獲金額は725万円で、前年(1,868万円)の39%、平年(7,044万円)の10%と低調に推移した。単価は286円/kgで、前年(381円/kg)の75%、平年(377円/kg)の76%と漁獲量の減少に追い討ちをかけるように価格も低迷した。これは、品質の劣るいわゆる“皮イカ”が多く漁獲されたことが一つの原因である。

近年のスルメイカ漁は、量、金額ともに1992年をピークとして減少傾向にあり、近年では低水準で横ばいに推移している。

月別の漁獲状況を見ると、2001年は例年漁獲のピークが見られる3～7月の量が極めて悪かった。また、その他の月も平年を大きく下回り、8月以降はほとんど漁獲がない状況が続いた。地元小型船による漁獲は8月以降ほとんど無かったが、沖合域では12月中旬以降活発な漁場が形成された。近年、日本海のスルメイカ資源は高水準であるが、日本海西部沿岸海域への来遊状況が悪く、沖合域で操業する大型船は比較的漁があるが、沿岸域で操業する5トン未満船は漁がないという状況が続いている。また、小型船は夏から秋にかけてのケンサキイカ漁に漁獲対象が移ってきており、小型船の

スルメイカ漁の衰退に拍車をかけていると思われる。

(2) ケンサキイカ



島根県西部海域を主漁場としている小型イカ釣り船によるケンサキイカの漁獲動向を図 10～12 に示す。2001 年の漁獲量は 51 トンと、前年 (129 トン) の 40%、平年(191 トン)の 27%と平成 4 年以降最低の漁獲量となった。漁獲金額は 5,838 万円で、前年(1 億 4,152 万円)の 41%、平年(1 億 9,198 万円)の 30%と極めて低調に推移した。また、単価は 1,143 円/kg で、前年(1,101 円/kg)の 104%、平年(1,033 円/kg)の 111%とほぼ平年並みで推移した。

ケンサキイカの漁獲量は明瞭な傾向は見られないが、1996 年以降減少傾向にある。また、月別の漁獲量を見ると、2001 年は 7～10 月にかけて漁獲のピークが見られ、ほぼ平年と同じような漁獲パターンであったが、漁獲量が極端に少なくなっており、今後の動向が注目される。

3. 沖合底びき網漁業

本漁業は東経 128 度以东の日本海南西海域を漁場としており、8 月 16 日から翌年 5 月 31 日まで操業を行なう (なお、6 月 1 日から 8 月 15 日までは禁漁期間)。ここでは統計上、漁期年を用い、1 漁期を 8 月 16 日から翌年 5 月 31 日までとした。

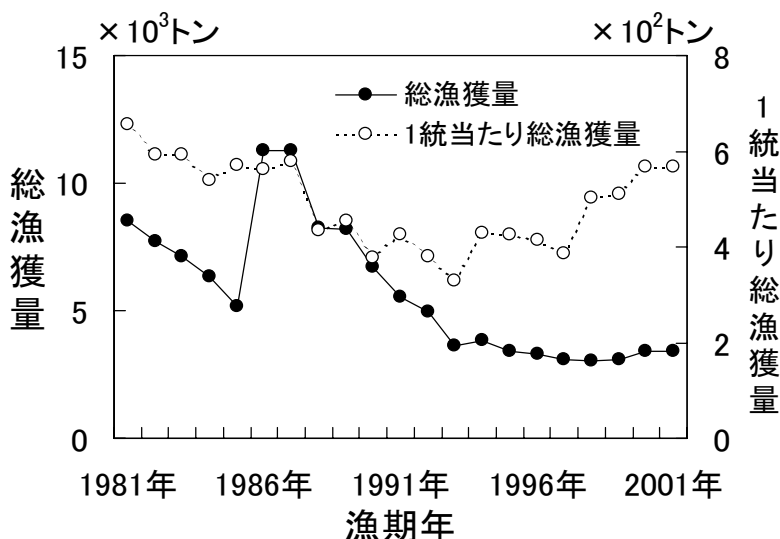


図13 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における総漁獲量と1統当たり総漁獲量の経年変化。

億6,454万円で前年をわずかに下回ったが、平年を25%上回り、2000年に次ぐ水揚げとなった。

(2) 主要魚種の漁獲動向

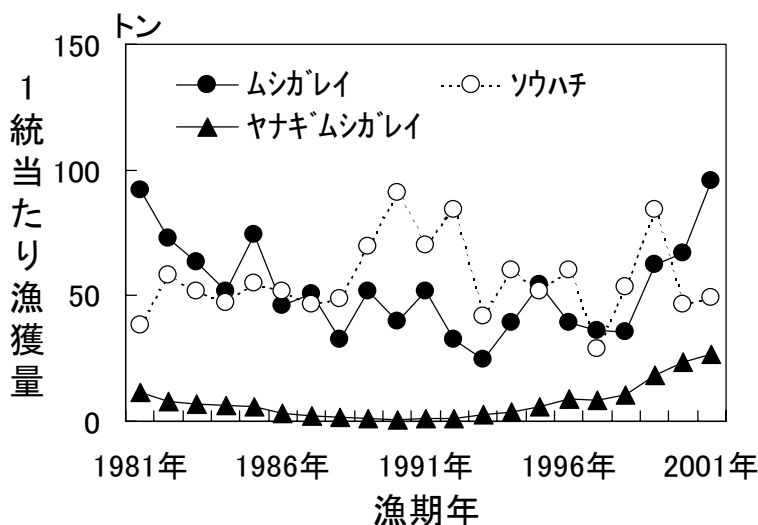


図14 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるカレイ類の1統当たり漁獲量の経年変化。

6%上回ったが、平年を15%下回った。

また、ヤナギムシガレイのCPUEは1981年以降減少傾向にあり、1990年には0.8トン/統まで落ち込んだ。その後、緩やかな増加傾向を示し、1998年には10トン/統を超えるまでに回復した。2001年の漁獲量は前年を11%上回る159トン、CPUEは26トンで平年の4.2倍の水揚げがあり、1981年以降最高の水揚げがあった。

(1) 全体の漁獲動向

図13に1981年以降の浜田港を基地とする沖合底びき網漁業（以下、浜田沖底という）における総漁獲量と1ヶ統当たり漁獲量（以下、CPUEという）の経年変化を示す。

総漁獲量は、1993年以降、横這い傾向にあり、3,000トン台で推移している。一方、CPUEは最近年増加傾向を示し、500トン台で推移している。

2001年漁期は6ヶ統が操業し、総漁獲量は3,397トン、CPUEは566トンで、1月の時化の影響により前年をわずかに下回ったが、平年（1981年～2000年平均）を18%上回った。また、総水揚げ金額は15億8,725万円、CPUEは2

①カレイ類

図14にカレイ類のCPUEの経年変化を示す。

ムシガレイのCPUEは1981年から1988年にかけて減少傾向にあったが、その後、周期的な変動を繰り返しながら近年は増加傾向にある。2001年の漁獲量は572トン、CPUEは平年を96%上回る95トンであった。

ソウハチのCPUEは1982年から1988年にかけて50トン/統前後で安定的に推移していた。1990年にかけて一時的な増加が見られ、その後、増減を繰り返しながら減少傾向にある。2001年の漁獲量は295トン、CPUEは49トンであり、前年を

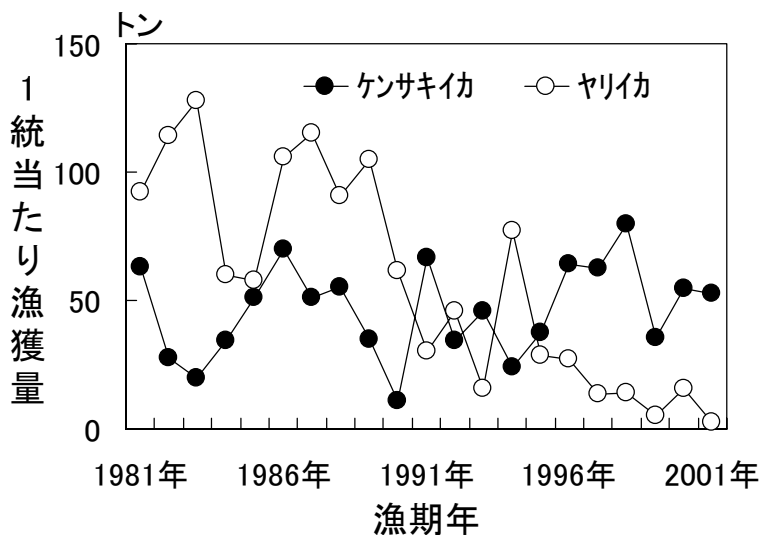


図 15 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるイカ類の1統当たり漁獲量の経年変化。

②イカ類

図 15 にイカ類の CPUE の経年変化を示す。

ケンサキイカの CPUE は数年周期で増減が見られ、最近年は減少傾向にある。2001 年の漁獲量は 314 トン、CPUE は 52 トンで前年をわずかに下回ったが、平年を 16% 上回った。

一方、近年資源的に低水準状態にあるヤリイカの CPUE は増減が見られるが、近年は低位横這い傾向にある。2001 年の漁獲量は 15 トン、CPUE は 3 トンで前年の 17%、平年の 4% に留まり、1981 年以降最低の水揚げ状況となった。

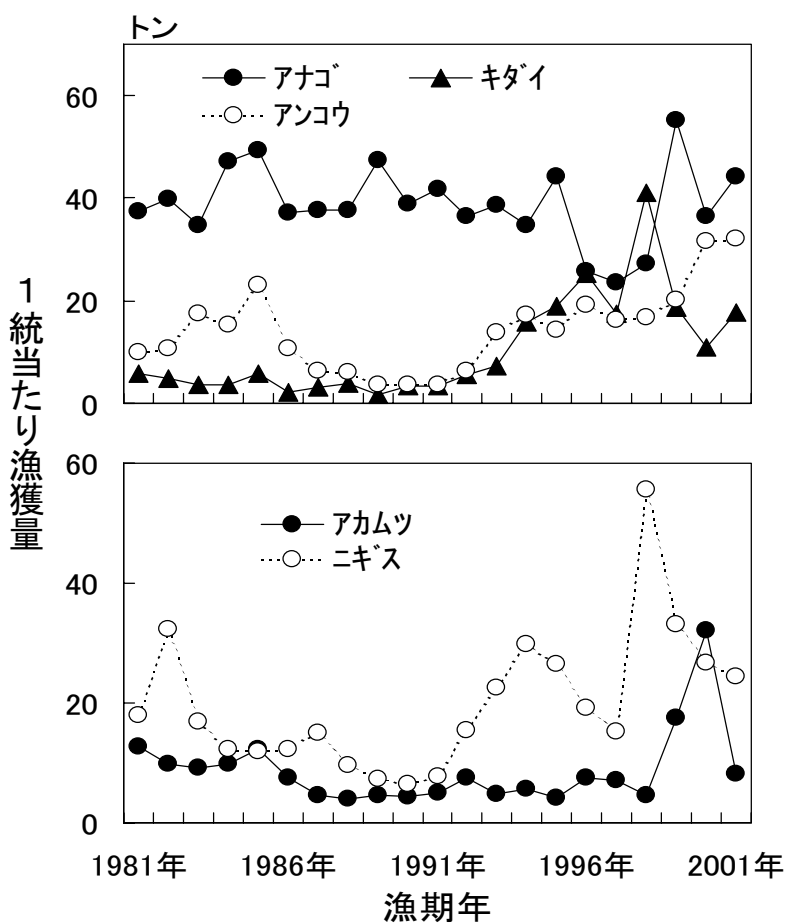


図 16 浜田港と基地とする沖合底びき網漁業における主要種の1統当たりの漁獲量の経年変化。

③その他

図 16 に沖合底びき網漁業で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要種における CPUE の経年変化を示す。

アナゴの CPUE は 1996 年に急減した後、25 トン前後で推移していたが、近年回復の兆しが見られる。2001 年の漁獲量は 266 トン、CPUE は 44 トンで前年および平年を上回った。

キダイの CPUE は 1998 年を境に減少傾向にある。2001 年の漁獲量は 106 トン、CPUE は 18 トンで前年を 60%、平年を 70% 上回った。

ニギスの CPUE はキダイの変動と近年類似しており、1998 年を境に減少傾向にある。2001 年の漁獲量は 146 トン、CPUE は 24 トンで前年をわずかに下回ったが、平年を 23% 上回った。

アンコウの CPUE は 1990 年代に入り 16 トン前後で推移していたが、近年増加傾向にある。2001 年の漁獲量は 192 トン、CPUE は平年の 2.4 倍の 32 トンで、1981 年以降最高の水揚げとなった。

アカムツの CPUE は 1986 年から 1998 年にかけて 6 トン前後で横這い傾向を示

していたが、近年増加傾向にある。2001年の漁獲量は49トン、CPUEは8トンで好漁であった前年を大きく下回った。

4. 小型底びき網漁業第1種

本漁業は山口県との県境北西沖から隠岐海峡にかけての水深80～180mの海域を漁場とし、現在61隻が操業を行なっている。操業期間は9月1日から翌年5月31日までである（6月1日から8月31日まででは禁漁期間）。ここでは統計上、漁期年を用い、1漁期を9月1日から翌年5月31日までとした。なお、県全体の操業隻数は61隻であるが、ここでは温泉津漁協所属船を除く60隻分の集計値を用いた。

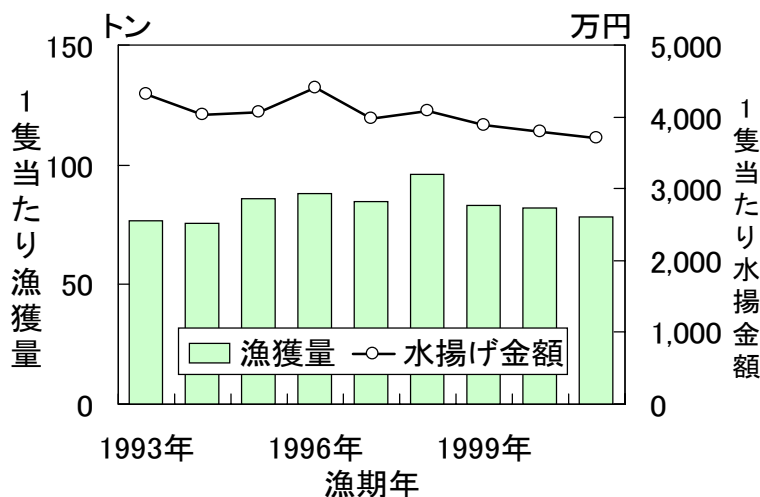


図17 小型底びき網漁業における1隻当たり漁獲量と水揚げ金額の経年変化

(1) 全体の漁獲動向

図17に1993年以降の小型底びき網漁業（以下、小底という）における1隻当たり漁獲量と水揚げ金額の経年変化を示す。

漁獲量は、1996年以降、漸減傾向にある。一方、水揚げ金額も近年減少傾向にあり、近年4000万円台を割り込んでいる。

2001年の小底全体の総漁獲量は4,712トン、総水揚げ金額は22億2,252万円であった。また1隻当たり漁獲量は79トン、水揚げ金額は3,704万円、量・金額とも前年（3～4%）および平年（8～10%）を下回った。また、1隻当たり操業日数は136日で前年および平年をわずかに上回り、近年増加傾向にある。

(2) 主要魚種の漁獲動向

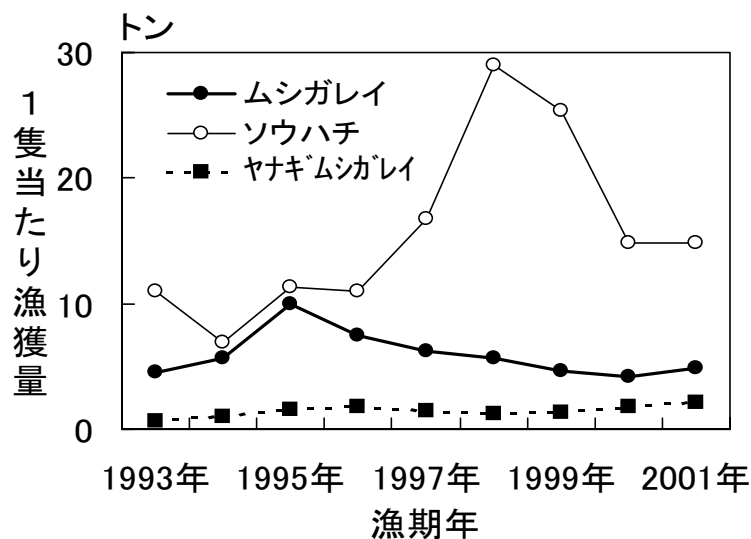


図18 小型底びき網漁業におけるカレイ類の1隻当たり漁獲量の経年変化

①カレイ類

図18にカレイ類の1隻当たり漁獲量（以下、CPUEという）の経年変化を示す。

ムシガレイのCPUEは1995年を境に減少傾向にある。2001年の漁獲量は292トン、CPUEは前年を17%上回る4.9トンであった。

1998年以降減少傾向にあるソウハチの漁獲量は892トン、CPUEは14.9トンで平年（1993年～2000年平均）を6%下回った。

メイタガレイの漁獲量は71トン、CPUEは1.2トンで前年を11%上回ったが、平年の6割の水揚げしかなかった。この他のカレイ類のCPUEを平年値と比較すると、ヤナギムシガレイ（2.1トン）は1.4倍、アカガレイ（0.5トン）は2.2倍、ヒレグロ（2.6トン）は2.6倍

の水揚げがあり、好調に推移した。

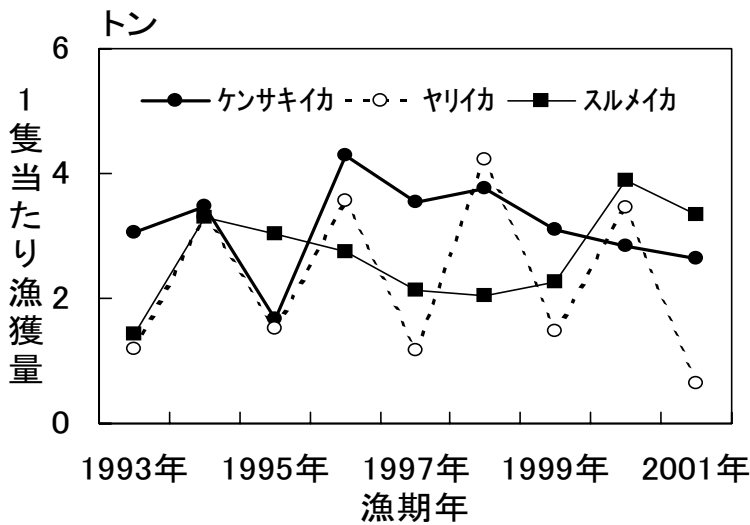


図19 小型底びき網漁業におけるイカ類の1隻当たり漁獲量の経年変化

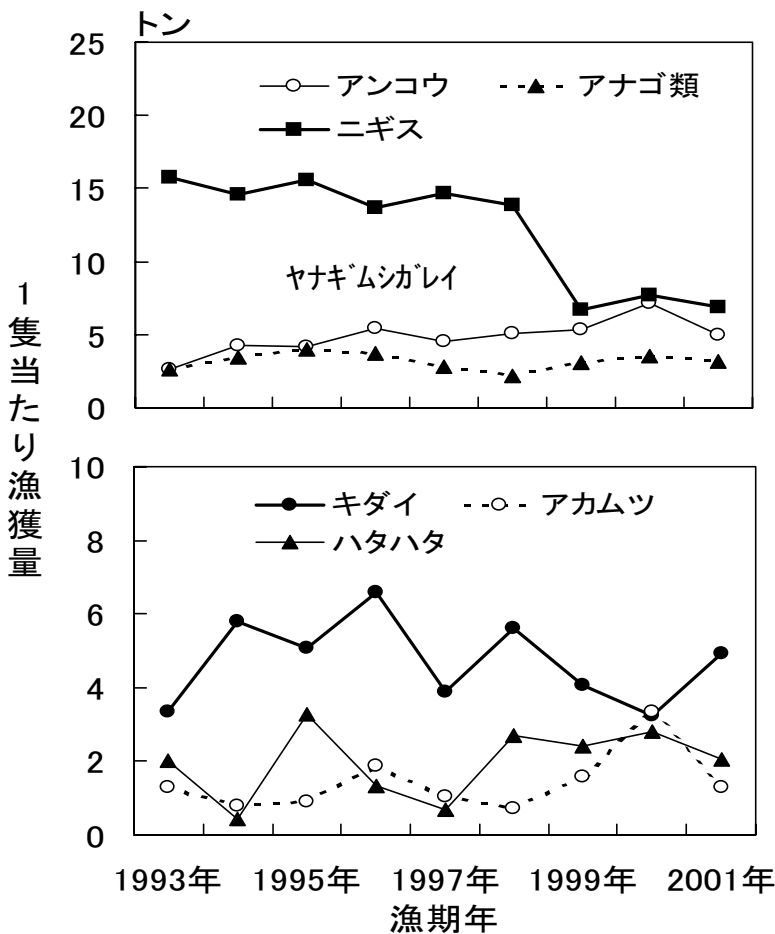


図20 小型底びき網漁業における主要魚種の1隻当たり漁獲量の経年変化

②イカ類

図19にイカ類のCPUEの経年変化を示す。

ケンサキイカのCPUEは1996年を境に減少傾向にある。2001年の漁獲量は158トン、CPUEは2.6トンで前年を7%、平年を25%下回った。

一方、ヤリイカのCPUEは1年おきに好不漁を繰り返している。2001年の漁獲量は39トン、CPUEは0.6トンで前年を81%、平年を77%下回り、1993年以降最低の水揚げとなった。

スルメイカの2001年の漁獲量は201トン、CPUEは3.3トンで前年を14%下回ったが、平年を28%上回り、2000年に次ぐ高い値となった。

③その他

図20に小底で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要種におけるCPUEの経年変化を示す。

ニギスの漁獲量は415トン、CPUEは6.9トンで前年を10%、平年を39%下回り、1990年代の資源水準と比べ、1/2まで減少した状況にある。

近年増加傾向にあるアンコウの漁獲量は301トン、CPUEは5.0トンで、前年を30%、平年を9%下回った。

アナゴ類の漁獲量は191トン、CPUEは3.2トンで平年並みの水揚げとなった。

前年好漁であったアカムツの漁獲量は77トン、CPUEは前年を60%下回る1.3トンであった。

周期的な増減を繰り返すハタハタの漁獲量は小型魚主体に123トンの水揚げがあった。またCPUEは2.1トンで前年を27%下回ったが、平年をわずかに上回る水揚げとなった。

1996年を境に減少傾向にあるキダイの漁獲量は296トン、CPUEは4.9トンで前年を53%、平年を6%上回った。